

## 「引き渡される夜」

ルカによる福音書 22 章 47-53 節

最後の晩餐のあと、イエスさまと弟子たちは、エルサレム郊外のゲッセマネというオリーブ園に行かれました。そこでイエスさまは神さまに長い祈りをささげられました。その祈りを終えてから弟子たちが待っているところにイエスさまが戻られると、12人の弟子の一人であるイスカリオテのユダが、イエスさまを裏切り、イエスさまを捕らえようとする人々を引き連れてやって来たのです。

このとき、イエスさまは、ユダが裏切ることはすでに分かっておられました。ですから、捕まることを避けようとするれば、この園には来なかったはずですが、イエスさまは、わざわざ行かれたのです。つまりイエスさまは、敵対者に不本意に逮捕されたのではなく、自ら彼らに逮捕させたのです。なぜなら、それが主の御心だったからです。

ユダはイエスさまに接吻しようと近づきます。接吻は、この地方の親しみを込めた挨拶です。また「接吻」という言葉は、ギリシャ語では「愛する」という言葉と同じです。つまり敬愛のしるしとして口づけをするのです。しかしユダの心の中は全く逆でした。それはまさに裏切りの口づけでした。ユダは、イエスさまへの接吻を、どの人がイエスであるかを教えるための合図としたのです。

ここで「裏切る」と訳されている言葉があります。この言葉は、文字通りには「引き渡す」という意味の言葉です。イエスさまは、これまで御自分が祭司長や律法学者たちの手に引き渡されると予告していました。それが、いよいよそれが現実のものとなるのです。ユダはイエスさまを死へ引き渡そうとするのです。

すると、その様子を見ていた「イエスの周りにいた人たち」、つまり弟子たちのことですが、彼らは剣を抜いて抵抗しようとしてしました。そのうちの一人、ヨハネによる福音書によるとそれはペトロであったと記されていますが、彼が剣を抜いて大祭司の手下に打ちかかり、その右の耳を切り落としたとあります。それは、武力で襲いかかろうとする者に対する必死の抵抗だったのかもしれませんが。あるいは、ペトロなりに、イエスさまを必死に守ろうとした結果と見ることもできるでしょう。しかしそれは、主イエス・キリストの御心ではありませんでした。

それから、イエスさまは、押し寄せて来た祭司長、神殿守衛長、長老たちにこう言われます。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってやって来たのか。わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいたのに、あなたたちはわたしに手を下さなかった。」

もし、イエスさまに逮捕されるべき罪があるならば、いくらでもその機会はあった

はずです。でも、祭司長たちはイエスさまに手を下すことはできなかった。それは、民衆が皆、イエスさまの話に聞き入っていたからです。もし、彼らの前でイエスさまを捕らえるならば、その理由を公に告げなければならない。しかし、祭司長たちは、その理由を何も見つけることができなかったのです。それゆえ、彼らが考えたことは、闇夜に紛れて、力づくでイエスさまを捕らえてしまおうということだったのです。

イエスさまは「まるで強盗にでも向かうように」と言われました。けれども、むしろ、強盗と呼ぶべきは祭司長たちの方です。本来、神に仕えるはずの祭司長たちが、力任せに罪なきイエスさまを捕らえようとしているのです。祭司長たちが、まるで強盗のように闇夜の中を振る舞うのです。

そのような中でイエスさまは言われます。「今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている」と。神に逆らう闇の力が、この場を支配しているのだと。

なぜ、ユダは接吻で主イエスを裏切ろうとしたのか。なぜ、祭司長たちが強盗のように闇夜に武器をもって振る舞うのか。なぜ、弟子たちが、武器をもって現れた群衆を前にして、同じように武器で立ち向かうのか。イエスさまは、ここに闇の支配を見ておられます。口づけをもって裏切ろうとするユダの心に、剣や棒をもって御自分を捕らえようと向かってくる祭司長たちの心に、神の力ではなく、武器を持って自らの力に頼る弟子たちの心に、闇の支配、悪魔の支配を見ておられるのです。

しかし、その闇の支配を打ち破るためにイエスさまは十字架の道を歩まれるのです。闇に支配された私たちの救いのために、闇に打ち勝つまことの光を輝かせるためにイエスさまは主の御心を為してくださるのです。